九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

[033] 語文研究表紙奥付等

https://hdl.handle.net/2324/10237

出版情報：語文研究. 33, 1972-05-31. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

執筆者紹介

田尻英三	九州大学助手
工藤重矩	九州大学大学院博士課程
田中道雄	鹿児島大学助教授
寺園司	青山学院大学教授
原口裕	静岡女子大学助教授
山田輝彦	福岡教育大学教授
狩野啓子	九州大学大学院修士課程

編集後記

新緑の机辺に第三十三号をおとどけ致します。

第二十六号あたり以下の編集後記にも反映している如く、いろいろと多事多端であったここ数年間―それらに比して、漸く落ち着いた、充実したふんい気で本号を送る事ができるのは、誠に幸せというべきでしょう。その事情は、本号が、普通号の三冊分以上に相当する前号刊行後、半年足らずの間に編まれたという事などからも、或程度お察し頂けるかと存じます。

研究室の充実については、彙報で詳しくお知らせ致しますが、先ず、この四月には、春日教授が、半年間にわたるスェーデンへの御出講を卒えて御帰朝になりました。また、中村教授の後任として、第二講座近世文学専門の中野三敏助教授をお迎えする事ができました。更には、この三月末、高知女子大に転じられた井上敏幸助手の後任として、田尻英三・福井迪子の両氏が、それぞれ第一・第二講座の助手に就任されました。二名の助手がそろうのは、随分久しぶりの様でございます。

御覧の通り、本号の所収論文は、中古・近世・近代及び国語学の各部門にわたりますが、それぞれに興味深い論が展開されております。新刊紹介の三編をもふくめて、いろんな分野に平均した編集ができたと言えば、自讃になりましょうか。若手の研究など、今後の発展に期待すべき面もなしとしませんが、皆様方から、率直な御批判をたまわりますれば、幸甚でございます。

最近、いわゆる編集後記を欠く学術雑誌が、とみに多くなってきました。もし、それが、本質的に、事務的連絡や、編集の楽屋落ちめいたものであるならば、その意義については、この辺で、或程度考え直すべきかとも思われます。ただし、事務的な事は彙報で済ませば結構という所までドライに割り切れない所に、本誌の性格の一面があるのかもしれません。とすれば、彙報欄のあり方など、なお考慮すべき面もあるのでしょうか。いろいろ御意見をお聞かせ頂きたく存じます。

なお、編集部では、本誌一頁分と同じ形式の原稿用紙（二十五行・二十八字詰）を準備しております。これによって、従来の本誌に散見された空白部分のむだと不体裁とが、かなり少くなるのでないかと期待するわけでございます。せいぜい御利用頂ければ幸いです。

（五月十五日沖縄の地に日の丸の旗飜る日、奥村記）